

クエ飼育試験

勝俣亜生・仲村伸次

クエは数十kgにも達する大型のハタ類で、近年、新しい養殖対象種としての要望が高く、日裁協を中心に各地で種苗生産試験が行われている。今のところ十分な種苗を生産するに至っていないが、数少ない「種苗が作られているハタ類」として養殖漁家の期待を集めている。

本種は、他の魚種同様冬季の低水温期の成長の停滞が認められており、沖縄で飼育することによって成長期間が短縮されることが期待される。

1. 方法

1995年11月1日に高知県にある(株)マリンテクノロジー研究所より平均20.8g、111mmの種苗425尾を輸送した。現地を10:30に出発し陸路で松山空港まで運び、那覇空港には20:15に到着した。大部分は那覇空港で開封し1.5tの活魚タンクに收容した。2箱(40尾)は梱包したまま沖縄県栽培漁業センターまで運び、23:30に開封した。

現地の水温は22℃で、梱包時に氷で20℃に下げた。到着時のビニール内の水温は18.8℃、活魚タンクの水温は23.7℃であった。

共食いで1尾斃死したほかに斃死はなかった。3日後までに斃死した2尾までを輸送による斃死とみなし、試験開始尾数を422尾にした。

この種苗はマリンテクノロジー研究所で生産したもので、産卵は6月30日(一部7月12日)である。輸送した時点で大きいものは15cmを越えており輸送に適さないため、100尾程度は同研究所に残された。餌はモイスト(エビ・

アジ・カニ 5 : ヒラメ用モイスト飼料 5 + ビタミンなど)であった。

栽培漁業センターでは50t水槽に收容しマダイ用ペレットのみを12月中旬まで朝夕2回、それ以降夕方1回飽食するまで投与した。池には隠れ場として塩ビパイプを数本入れた。1995年11月30日の測定時に痩せて小さいもの23尾を別の水槽に移した。1月29日にはこれらの魚のうち極端に小さい2尾を除いた19尾を再び他の魚と一緒にした。1996年1月24日には別の50t水槽へ、また、2月29日には10t水槽へ池替えをした。

体重と全長は総尾数の10~20%をサンプルとして取り上げて測定し、平均を求めた。池替えの際には尾数を確認した。

2. 結果 飼育結果を表1に示す。飼育水温は11月が23~24℃、12月下旬から3月中旬まで20℃前後でその後徐々に上昇した。最低は2月10日の17.7℃であった。19.5℃以下の日は5日しかなかった。

輸送後1ヶ月は1日1~数尾の斃死がだらだら続いたので、11月30日から2日間OTCを経口投与したところ、12月以降の斃死はわずかになった。

摂餌率は当初の約3%から0.6%まで徐々に低下したが、それほどの成長の停滞はみられずこれまで飼育したハタ類の中で最も成長が速かった。これまでのハタ類の飼育経験から、1996年の末までには1kgを越えるものができると思われる。

表1 平成8年度 クエ飼育結果

測定月日	体重(g) (最大、最小)	全長(mm) (最大、最小)	飼育尾数	生残率 (%)	餌料効率 (%)	投餌量 (g)	投餌 日数
1995年11月 1日	20.8 (33.8、 8.8)	111.4 (129.0、 81.2)	422				
11月30日	39.6 (66.2、 16.8)	133.7 (160.4、 104.2)	383	90.8	93.1	6.234	19
1996年 1月24日	62.8 (131、 26)	156.3 (197.5、 124.2)	372	97.2	80.8	9.554	35
2月29日	77.4 (167、 28)	167.6 (217、 125.3)	368	98.9	90.1	5.928	30
4月 4日	102.7 (247、 42)	183.8 (239、 142.4)	368	100	124.3	7.450	35